

昨夜はよく眠れなかった。

明け方少しまどろんだだけで十分な睡眠は摂れなかった。瞼が腫れぼったい。目は充血してる。いつも明晰に冴えた頭がぼんやりしてるのはきつと睡眠が足りないせいだ。

考え事に気を取られてシャベルを持つ手に力が入らない。労働に身が入らない。

由々しき事態だ。雑念に囚われて労働に支障をきたすなど天才のプライドが許さない、深刻に考慮せねば、早急に対処せねば……駄目だ、集中力が散る。思考が分散する。これも全部サムライのせいだと責任転嫁してシャベルを振るえば、先端が地を穿った拍子に砂が飛散。

大量の砂を顔に被ってうんざりする。

「くそっ」

口汚く毒づき、手の甲で顔面の汗と砂を拭う。

今日は朝からさんざんだ。サムライとは結局一言も口を利かなかった。僕は意図的に会話を避けていた、サムライもまた意図的に接触を避けていた。サムライはあれから一度も僕の目を見なかった。

朝の気まずい雰囲気を感じ出せば気分が重く滅入る。

洗顔時もうだ、早起きのサムライは僕が起きた頃にはとっくに身支度を済ませて毎朝の日課である木刀の素振りに勤しんでいた。決して僕の目を見ないことを除けばいつも通

りだった。僕はサムライの視線を過剰に意識しつつ顔を洗ったというのに、鏡に映ったサムライの顔は憎たらしいほど涼しげだった。

上段の構え、正眼の構え、下段の構え。

若竹のように背筋凛々しく、端正な姿勢で木刀を振るい、虚空を撫で斬る。

見慣れた朝の光景。サムライは毎朝自主的に稽古をしてる、誰に命じられたわけでもなく毎朝律儀に基本の型を踏襲してる。武士たる者日々精進を怠らない姿勢は立派だと感心しなくもないが、昨夜のことなどまるで覚えてないというふうな態度が癪にさわって仕方がない。

まるで、何もなかったみたいに……

『何もなかった』？ とんでもない、人にあんなことをしておいて。

サムライの態度に憤慨した僕は朝から一言も口を利かず無視を決め込んだ。僕に無視されても戸惑う様子もなく、サムライはいつも通り、僕と一緒に食堂に行き僕の隣で朝食を食べた。無神経ここに極まりりだ。彼がしたことを踏まえれば然るべき謝罪があつて当然だが、それもなし。説明もない。一切なし。おかげで何故彼があんなことをしたのか、あんな振るまいに及んだのか僕はわからないままサムライと別れて今ここにいる。イエローワークの砂漠で用水

路建設にあたつてゐる。

イエローワークに復帰して二週間が経つ。

誰もが歓迎したかというところでもなく、「なんで戻つてきたんだ」と露骨に顔を顰める同僚が多かつた。自分が嫌われてることくらい知つてゐる、今更傷付くはずもない。売春班上がりだと軽蔑されても心は痛まない。低脳を相手にするのは時間の無駄、低脳と議論するのは類人猿に因数分解を教えるに等しい愚だ。彼らの嫌味をいちいち取り合つてゐるほど僕は暇じゃない。

僕はイエローワークに戻れたことを感謝する。売春班の一週間と比べればイエローワークの過酷な労働も苦にならない。たまに炎天下で眩暈を覚えて穴に落ちたりもするが、二週間を経て体力が回復するにつれ貧血の頻度も減つた……気がする。あくまで気がするだけかもしれないが。

僕がいない間に砂漠に変化が起きていた。

以前僕とロンが共同で掘り当てたオアシスから方々に水路が引かれて畑ができていたのだ。畑では品種改良されたジャガイモを代表に砂漠の環境にも適応した作物が栽培されている。終わりの見えない不毛な穴掘りは情け容赦なく囚人の気力体力を奪いさるが、栽培収穫の目的ができてから飛躍

的に労働意欲が向上したらしく、イエローワークの砂漠で働く囚人の顔は生き生きしてる。

用水路建設もまた新たに増えた労働の一環だ。

オアシスから新たに用水路を引いて畑予定地を耕す下準備を割り当てられた数十人が、各々手分けして側壁に土嚢を積んだりシャベルで溝を掘ったり作業にあたつてゐる。顎先を汗が滴る。

灼熱の太陽が頭上で輝く。

太陽の高度に比例して気温は上昇する一方だ。炎天下での労働は熾烈を極め、熱射病に倒れる者や脱水症状を起こす者が続出する。砂漠で倒れたらそのまま埋められるだけだ。都合がいいことに、イエローワークの砂漠には人一人埋めるのにちょうどいい深さ大きさの穴が無数に点在している。僕らは働き蟻のように穴を掘る、仲間を埋める墓穴を、いつか自分が埋まる墓穴を。

シャベルに寄りかかり、手の甲で汗を拭いて周囲の囚人を眺める。小休止。周囲には無数の囚人が散らばって看守の監視のもと働いている。リヤカーで砂を運んだり鍬やシャベルで砂を掘り返したりブリキのバケツをぶら下げてオアシスに水を汲みに行ったりと忙しない。両手にバケツをぶら下げてオアシスと持ち場を往復する囚人を見送る僕の頭上に、スツと影が射す。

「汗水流して精だしてるみてえじゃんか、親殺し」

頭の悪い声でした。目で確認する前に誰だかわかった、顔を上げるのも億劫だった。休憩終了、シャベルを両手に持ち仕事を再開。声の主を無視してシャベルを振るい、

「！」

突然、後ろ襟を掴まれ引き倒された。喉を絞められて息が詰まった。

僕の後ろ襟を思いきり引つ張ったその人物がスニーカーの靴裏で盛大に砂を跳ね散らかして斜面を滑降、用水路の底に着地する。一人じゃない。二人、三人……三人いた。皆見覚えある顔、僕と同じ班の連中だ。僕を敵視してる者ばかりだ。

売春班にとばされる前から彼らには日常的にいやがらせを受けてきた、わざと足を引つ掛けられたりシャベルを脛にぶつけられたりリヤカーで轢かれかけたり数え上げればきりがない。単なる「いやがらせ」では済まない、命に関わる事故に発展しかねない危険性もあるのに彼らは一向に反省も加減もしない。懲りない連中だとあきれる。

最も、万一僕が死んだ場合は作業中の事故として処理されるだけで彼らには何のお咎めもないのだから、いやがらせがエスカレートするのは自明の理だ。

「何か用か」

面倒くさい連中に捕まった。

迷惑げに眉をひそめて聞けば、中のひとりが肩を竦める。

「同じ班の先輩として、ひ弱な日本人がへばつてねえか見た来たんだよ」

「日本人はすぐサボるからな」

「信用できねえもんな」

「貴様らこそ自分たちの持ち場に戻ったらどうだ。現場監督の看守に見つからないうちに」

僕を取り囲んだ連中は優越感を隠しもせずにやにや笑つてゐる。大勢で群れて獲物をいたぶる行為に陰湿な快感を見出したゲスの笑顔。辟易。内心舌打ちして、正面の囚人を睥む。

見覚えある顔……売春班初日に僕を犯しにきた同僚が野卑に笑つていた。

「イエローワークに復帰して二週間、真面目にやつてゐてえじゃんか。感心感心。でも、そろそろ売春班が恋しくなってきたんじゃないか。お前ら売春夫はみんな男なしじゃ生きられねえ淫乱揃いだからな、セックス浸けの日々が懐かしくてケツが疼いてる頃だろ？ なんなら俺たち全員で相手してやろうか」

「なあに、そんなに時間はかからねえさ。五分ありや上等だ、その物置小屋に引ッ込んでケツまくつて……」

「おつかねえ顔すんなよ。同僚なんだ、仲良くしようぜ」
 「こいつから話聞いてるぜ、お前買った時のこと。立ったままやったんだろう？　こうやって洗面台に寄りかからせてケツまくって後ろから突っ込んだんだろう。可哀想に、痛かったら。処女相手にも容赦ねえからな、こいつ」

「安心しろ、俺たちや優しくしてやるよ。お前の穴という穴に舌突っ込んで一粒残らず砂ほじくりだしてやるよ」

僕を犯した少年を小突きながら仲間が哄笑する。中央の少年は腰に手をあて尊大にふんぞり返っている。陰険に目を細め、唇をしつこく舐め上げて、期待と興奮を込めて僕を眺めている。

物欲しげな顔だった。

彼が得意になって僕を犯した時の状況を吹聴してたと知っても、何の感慨も持たなかった。ただ、軽蔑しただけだ。

「身のほど知らずにも、僕に交渉を持ちかけているのか」眼鏡のブリッジに指を添えて嘆息する。笑い声が止み、同僚が気色ばむ。剣呑な雰囲気。険悪な形相に豹変した同僚三人を観察、シャベルを放り捨てて中央の少年に歩み寄る。さくさくと砂を踏むごとに売春班初日の悪夢が鮮明に甦る。僕を洗面台に押さえ付けてズボンを剥いで背中のにしかかつて『顔上げろよ』汗まみれの素肌を密着させ『ちゃんと感じて顔見ろよ』『鏡に映ったいやらしい顔を』立たせた

まま後ろから犯した……忌まわしい記憶。陵辱の記憶。僕と対峙した同僚三人が顔強張らせてあとじさる。

僕の気迫に押されたのが眼光の強さに怖じたのか、目には怯えと当惑が浮かんでいた。加害者と被害者の立場が逆転したかのような、颯然と一方の獲物が突如反撃に転じたかのような色濃い戸惑いを覚えてるのは明白。

中央の少年の前で立ち止まる。

「なん、だよ」

少年が寄り目で凄み、僕の胸ぐらを掴もうとする。その手を素早く払い、無造作に手を伸ばし、逆に少年の胸ぐらを掴む。左右の同僚が何か言いかけるの視線で制して正面に顔を戻す。

「僕を抱きたいか？」

吐息のかかる距離に顔を寄せ、訊く。耳朶で囁かれた少年が驚きに目を見開く。意外げな表情がいつそ愉快だ。同僚の胸ぐらを掴んだまま、挑戦的に微笑む。

「言っておくが、僕は高いぞ。君らごときが足掻いても手も届かないほどに」

自信を込めて断言すれば、同僚が絶句する。まさか、こう返されるとは思ってもみなかったのだろう。意表をつかれて言葉を失った同僚たちの間抜け面を眺め、失笑を囁み殺す。少年の胸を軽く突き放し、余裕ある足取りで元の場所

に戻り、自然な素振りでシャベルを持ち直す。

「……はっ！ 元売春夫がでけえ口叩きやがって、何様のつもりだお前。体に触れる客を選ぶ権利が売春夫ごときにあるつての、笑わせるぜ」

虚勢を張って吠えたてる同僚を一瞥、嘆かわしくかぶりを振る。まったく頭が悪い、理解力の乏しい連中だ。こんなにわかりやすく説明してやつというのにまだ不満なのかと疲労を感じつつ続ける。

「そうだ。僕に触れる人間は僕が決める、君たちはその選から漏れた、それだけの話だ。実に単純明解だろう。用が済んだなら可及的速やかに消えてくれないか、仕事の邪魔だ。視界に汚物が入るのは精神衛生上悪い。最低15メートル離れてくれ、君たちの下品で猥褻な声が聞こえると労働意欲が削がれる」

「おっ……俺の下で喘いでたくせに!!」

憤怒で顔を染めた少年がこぶしを振り上げる。とんでもない誤解だ、ありもしないことを捏造されては困る。シャベルを砂に突き刺し、眼鏡の弦に触れて下を向く。再び顔を上げた時、口元にはこらえきれず笑みが浮かんでいた。

低脳どもの神経を逆撫でする、不敵な笑みか。

「勘違いするな。君が僕の上で喘いでたんだらう」

「こおおおおおおおの野郎!!!!!!」

怒り爆発した同僚が一斉に襲いかかってくる。多勢に無勢、僕に逃げ場はない。面倒なことになったなと醒めた気持ちで同僚を待ち受ける最中、頭上にまたも影がさす。用水路の縁に人影が佇んでこちらを覗きこんでる。逆光に塗り潰された人影は肩にシャベルを担いでおり、そのシャベルが勢い良く振るわれ、そして……

「ぶわっ!？」

「この野郎、なにしが……」

砂で目くらましした直後に足元に置いたバケツを抱え上げて中身をぶちまける。全身びしょ濡れで転倒した同僚たちが砂に顔を埋めてもがき苦しむ。その上にさらにぎくざく掘った砂をかける。

「水の次は砂、この順番でぶっかけりやあ身動きとれねえ。びしょ濡れの肌に砂がこびりついて、体じゅうの穴という穴塞がれて呼吸できなくなるのだろ」

得意げな声とともに頭上から降ってきたのは小柄な影……からのバケツを両手にぶら下げたロンだった。スニーカーの靴裏で斜面を滑降、僕の隣へと着地したロンを睨む。

「なんて荒っぽいことをするんだ、僕の顔にも水が飛んだじゃないか」

「それが命の恩人に対する言い草かよ」

「君が不要な介入をしなくても事態を收拾することはできた、僕の計算が正しければあと二秒で：」

「お前ら、ここで何をやってる!! さっさと持ち場に戻れ!!」

「やべっ、看守だ!」

「警棒食らう前に逃げろ!」

僕の予想は的中した。用水路の異状を察して駆け付けてきた看守が警棒をさかんに振り回して三人組を追いつ立てる。看守に叱責を浴びせられた三人が舌打ち、這う這うの体で斜面をよじのぼり持ち場へ駆け戻っていく。

最後尾、売春班初日に僕を犯した少年が振り返り際に中指を立てる。

「覚えてろ親殺し、いつか満足いくまで犯してやるからな! 班の連中全員でお前のケツ回してやる、二度とそんなでかい口叩けねえよう駄てやる! タジマがいなくなつたからつて調子のもつと痛い目見るぞ!」

「ピンチの時のタジマ頼みか。とつとと消えるゲス野郎」砂煙に紛れて消えた同僚の背にロンが吐き捨てる。同僚たちが走り去つたのを確認後に警棒を振りながら看守も立ち去り、あとには僕とロンが取り残された。

「それで? いいのか、捨ててしまつて。バケツに水を汲みに行くのが君の仕事だたんじやないか」

からのバケツを一瞥、あきれた声で指摘すればロンがこの

上ない浚面を作る。

「仕方ないだろ、お前が囲まれてるのを見て慌ててすつとんできたんだから。あまた性懲りもなく絡まれてるドン臭いヤツだなんて呆れたぜ。力でかなわねーくせに挑発するのやめろよ」

「挑発などしてない。ただありのままの事実を述べただけだ。僕の体に触れる人間は僕が決める、彼らには僕に触れる資格も権利もない。爪垢が溜まつた手で体をまさぐられるのは不快の極みだ、接触感染する病気がうつらないとも限らない。彼らときたら疫病を媒介するネズミやゴキブリよりタチが悪い、半径一メートル内に近付かれると殺虫剤を噴射したくなる」

「お前にさわれるのはサムライだけつてか」

ロンが鼻先で笑い捨てる。反論しようとして、続く言葉を飲み込む。確かに、ロンの言い分は正しい。サムライになら触られても不快じゃない、どころか僕は心地よささえ感じている。

昨夜だつて。

「……………」

昨夜、サムライは僕の唇を奪った。理由はわからない。人さし指を唇に滑らせ、物思いに耽る。

昨夜、深夜の図書室にホセを呼び出して真相究明した。僕

の優秀な推理力が導き出した仮説はホセが黒幕だと示していた。本来僕一人で行く予定だったがサムライが強引に誘ってきた。僕はホセを糾弾したが相手はさすがに隠者の、のりくろりと核心をはぐらかされて僕より一枚も二枚も上手だと痛感するに至った。結局僕はホセの本心を暴くことができなかった。この僕ともあろう者が、IQ¹⁸⁰を誇る天才鍵屋崎直ともあろう者が頭脳戦に破れたのだ。内心忸怩たるものがある。

だがそれより僕を動揺させたのは、昨夜のサムライの行動。突然僕に襲いかかり、唇を奪ったサムライの行動。

片手に預けたシャベルの存在も忘れ、首をうなだれ立ち尽くし、人さし指で唇をなぞる。唇にはまだキスの感触が残っている。サムライの唇は熱かった。血潮の火照りが感じられた。性急で拙いキスには切迫した一念が感じられた。何故こんなことをしたのかと理路整然と問いたですことはできなかつた、僕自身動揺していたのだ。自分の身に起きたことを分析するのを頭が拒絶して、僕はサムライに背中を向けて逃げるようにその場を去った。

サムライの唇の感触を反芻するように、指で撫でる。

サムライは何故僕にあんな真似を？ わけがわからない。理由が知りたい、動機を究明したい。だが同時に、強制労働を終えて房に帰り、彼と顔を合わせるのが気鬱でもある。

僕にはサムライの目を見る自信がない。今朝から、いや昨夜から僕はサムライを過剰に意識してる。彼の視線や息遣いを意識するばかり普段なら絶対しないはずのミスを連発してる。洗面台の蛇口を捻りすぎて顔に逆噴射したり食事中に箸を落としたり……

おかしい、こんなの僕らしくない。

たかがキスじやないか、あの程度のことでは何故こんなに動揺してるんだと自分に当惑する。しつかりしる鍵屋崎直、冷静になれ。たかがキスじやないか、口唇接触じやないか。舌を挿入されたわけでもない、ただ唇と唇が触れ合っただけの幼稚なキスで妄想を逞しくしすぎだ。

きつと何か理由があるはずだ、僕の唇を奪った理由が。

でなければサムライがあんな振るまいに及ぶはずがないと結論付ければ、脳裏に推測が閃く。

「熱病の一種か」

「あん？」

妙な声をだしたロンを振り向き、人さし指を立てる。

「僕の推測によるとあれは熱病の一種に違いない、東京プリズンの衛生状態は最悪だから悪性の疫病や熱病が流行する可能性は多いにあり得る。眩暈吐き気の他に幻覚症状を伴う熱病に罹患したのかもしれない、サムライは。そう、きつとそれが正しい、サムライはあの時一種の夢遊病状態

だったんだ！ だからたまたま近くにいた僕に……こうしてはいられない、強制労働を終えたら図書室に直行して医学書を調べねば。僕の知らない病気があつたなんて不覚だ、職務をさぼって将棋に打ちこむヤブ医者者は信用できない、天才の威信に賭けてこの僕が熱病の真相を究明せねば……」考えてみれば単純なことだ。サムライはきつと新種の熱病にかかったんだ、ゴキブリやネズミが媒介する病気に感染して昨夜あんな……あんな、サムライにはふさわしくない真似を。なんてことだ、早期に手を打たなければ。一人ぶつぶつと呟く僕をシャベルに凭れたロンが薄気味悪そうに眺めている。

「おい鍵屋崎、頭大丈夫か。暑さでイカレちまったのか」痺れを切らしたロンが不審げに眉をひそめ、僕の顔の前で手を振る。

「失礼なことを言うな、僕はサムライと違って心身ともに健康だ、寝不足気味かつ貧血気味なことを除けば体に異常はない。憂慮すべきはサムライだ、熱病の兆候に気付きもしない低脳どもだ。早期に対策を練らねば大変なことになるぞ、熱病患者が東京ブリズンに溢れて手当たり次第に……ああ、僕としたことが迂闊だった！ 危険視すべきはネズミやゴキブリだけじゃない、蠅や蚊が病原菌を媒介することも十分あり得るじゃないか、くそ！ 病原菌を媒介する

害虫を一掃しない限り東京ブリズンに未来はない、ちょうどいい機会だ、日夜僕の平穏を脅かす昆虫綱ゴキブリ目ゴキブリを絶滅させる方法を本格的に考えねば!!」

サムライが罹患した熱病の正体究明から害虫駆除へと目的が移行しつつあるが、まあいい。大体東京ブリズンの衛生管理が杜撰だからゴキブリやネズミが繁殖して謎の熱病が蔓延するんだ、東京ブリズンの体質を根本から変えない限り悪循環は断ち切れない。ロンは僕の隣で呆然としている。僕の頭の回転の速さに完全に置いてかれて口を挟めないらしい。

それでも顔を引き締め、何か言いかけたロンの背後をシャベルを抱えた囚人が通り過ぎる。

「処女喪失おめつとさん！」

は？

ばん、と乾いた音が鳴る。すれ違いざま囚人がロンの尻を叩いたのだ。続けざまに二・三人が通りすぎ、連続でロンの尻を叩き、揶揄とも祝福ともつかぬ卑語を浴びせる。

「遂に男になったな、いや、女になったが正しいか？」

「昨日はずいぶんお楽しみだったみてえじゃなか、羨ましい。隣近所に筒抜けの喘ぎ声響かせてよ」

「後で初夜の感想聞かせてくれよ。レイジのモンのサイズとかな」

「手がイカくせえぞ。半々の喘ぎ声に興奮して朝まで又きまくったんだろ。何回イったんだ、おい」

「おい半々、何ラウンド行つたんだ？ レイジは精力絶倫だから一回や二回じゃ満足しねえだろ」

「晴れてレイジの女に昇格だ。東京プリズンの女王サマ名乗れるぜ。喜べよ」

シャベルや鍬を抱えた囚人がロンの尻を叩き、足早に去っていく。最後尾の囚人が立ち去ると同時にロンがシャベルに凭れてその場にしゃがみこむ。悶絶。首をうなだれまた仰け反らせ、激しく身をよじるロンを遠方で指さして囚人たちが爆笑する。

「~~~~~いいつでええええええええつ……あいつらわざとケツ叩きやがったな、くそつたれ!!」